

ある日あいつは変わった
物事に興味を示さなくなり
わかっていたように振舞うようになった

ある日あいつは変わった
俺を拒むようになり
俺を憎むようになった

高校最後の文化祭も終わり定期試験も無事に終わりを迎えた。あと4日で終業式というそんな時期

俺はあと少しで来る冬休みをいまかいまかと待っている。しかし俺の隣で少し浮かない顔をしている男がいる

俺の一番の友達。親友ってやつだ

「おい、どうした？暗いぞ」

「……………ん？ああそうだな……………」

最近はいつもこの調子だ。一体何があつたんだ？

学校が好きで冬休みが来ないで良いっていうタイプでもないし
こいつが変わったのは少し前か……………

あの日はあいつが前日に返してもらおう約束をした物を忘れたんだ
普段は絶対そんな事しないはずだ。しかし俺も何故だか咎める気にはならなかった
まるであいつが忘れることを分かってた様に……………

その日を境にあいつは変わったんだ。何事にも興味を示さなくなった
しかし時折普段のあいつに戻る

そんな事を一日考えてしまっていた
放課後、あいつをゲーセンに誘おうとすると

「なんだ？ゲーセンか？」

「お……おうそうだよ、よくわかったな」

「まあな。よし行こうぜ」

俺達はゲーセンに向かった

しかし遊んでいるというのにあいつはどこか上の空だ

あいつの得意のゲームを勧めてみるがやろうとしない

そこに次に来たやつは強かった。あれには流石に勝てないだろう。やらなくて正解だったな

次の日、俺はあいつが何か悩んでるのではないかと思ひ声をかけた

「お前何か悩んでるんじゃないか？」

「いや……そんなことはないけど」

「けど……どうした？」

「いやなんでもない」

「そうか………なあ俺って前にもこんなこと言ったっけ？」

「い……いや、そんなことはないぞ」

今、あいつが一瞬普段の明るさに戻した気がする

俺が終業式の後に遊ぼうと誘うとあいつは断ってきた

いつもなら遊ぶはずなのに

俺は不審に思っただけで食いが下がらずに誘うと別の友人と遊ぶと言うではないか

しかし明らかに嘘を吐いている様だ

「じゃあその友達も一緒に……」

「俺とお前は一緒にいちゃいけないんだっ！！」

時間が止まったようだった

もう何も言えずにその場を後にした

終業式の後に俺は他の友人に誘われたので遊ぶことにした

街をブラブラしていると

あいつと遊ぶ筈の奴らがいる

俺は思わずそいつらに声をかけてあいつの事を聞くがそんな約束はしてないと言われた

俺は友人に謝りあいつの家に向かった

……はずだったんだが

気が付くと学校の前にいた

しかし何故だか疑問は浮かばない

俺は迷い無く学校に入っていく

するとあいつが教室にいた

教室は暗く上手くあいつを見る事が出来ない

「おい、なにしてるんだよ？　こんなところで」

「なんで？　お前がここにいるんだよ？」

「お前と遊んでる筈の奴らに会ったんだよ」

「なんでだよ……せつかくあいつらにお前を誘って遊びに行くように言ったのに……やっぱりこうなるのか」

「は？　何言ってるんだよ？」

月明かりで教室が照らされたときに俺はあいつの持っているものに目を疑った

あいつは手に刃渡り30センチはあるナイフを持っていた

「何を怖がってるんだ？　大丈夫だ、何も殺しはしない」

口調が穏やかなのが妙に怖くなった

少しの間俺達は静寂の中にいた

しかしあいつは何か覚悟を決めたように動き出した

あいつはナイフを振り上げ俺に襲い掛かってきた

とっさにナイフをかわし逃げるが、尚も追ってくる

俺は数ある教室から家庭科室を選び飛び込んだ

まるで何かに導かれるように……

家庭科室に逃げ込みドアを押さえるがジリジリとドアが開いていく

俺はドアから離れ、棚にあった包丁を手に取りあいつの方へ向け威嚇する

「またかつ！？お前はまたそうするのかっ！」

何を言ってるんだ

襲ってきたのはお前の方からだろ

第一俺は一度もお前を襲ったことなど無い

「俺はお前がいると安心できないんだよっ！」

初めから俺はあいつを殺す気など無い

しかしあいつは本気だ

調理台を中心に俺達は距離を取っている

しかしあいつが距離を縮めるために調理台に乗ったときだった

最後はあつけないものだった

あいつが足を滑らせ、俺の持っている包丁に胸を刺した

一瞬なにが起きたか分からなかった

「またかよ」

あいつの言葉で我に返る

俺は必死で名前を呼ぶ

しかし声は返ってこない

「俺が殺したのか？」

事故と言えば事故になるだろう

しかしあいつは紛れも無く俺の持っている包丁に体をうずめている

あいつはまだ息があるらしく何かを言っている

「お前は俺を何回殺せば気が……済むん……だ」

この言葉を最後にあいつは息をしなくなった

警察に連絡して俺はその場を後にした

学校を出てからふと俺は最近のあいつの言動を思い返していた、そして俺がいただく疑問も……

しかし考えが浮かび疑問は消えた

あいつはこの数日間を繰り返している

そして最後は決まって俺に殺される

「ついてないな……どうにかして自分の運命を変えたかったんだな」

しかし最後にもう一つ疑問が浮き上がった

「最初に俺があいつを殺した理由は何だ？」

いつからだろう？

もう数えるの止めたのは……

少し前までは諦めてはいなかった

でももうそれも無理だ

いくら繰り返しても終わりが来ない

一体、何故こんなことになってしまったのか……

理由は分かっている

あの男が原因だ……

俺はもう一度思い返してみる

あの初めての四日間のことを……

終業式三日前

その日はいつもと変わらず過ごしていた

仲の良い友達と冬休みの計画を立てていた

その中にもいつも居た

俺達はいつも学校が終わるとゲーセンに寄るのが習慣になっていた

その日も例外なくゲーセンに寄っていた

あいつがトイレに行っている時だった

スーツ姿にサングラスをした男が近づいてきて

「……………人生をやり直したいか？」

と聞いてきたんだ

宗教の勧誘と思った俺は無視してその場から離れた

気味が悪くてゲーセンから出たところであいつを置き去りにしてきたことに気付いた

しかしもう一度ゲーセンに入ることには出来なかった

あの男に会うのが嫌だったから

次の日、あいつが俺に何で昨日は勝手に帰ったのか聞いてきたから俺はありのままに答えた

しかしそんな男は居なかったと言われた

人が少なかったから良く覚えていても

俺は混乱した

俺が見たのは何だったのか？

夢でも見ていたのか？

俺だけが見えていた男……何者なんだ？

その日から俺の周りで可笑しな事が起こるようになった

俺しか聞こえない声、俺しか見えない人間

あの男に会ってから何かが変わり始めていた

その所為で俺は周りから変な目で見られるようになってきた

終業式の日には完全に孤独だった

唯一人あいつを抜かしては

あいつだけは変わらずに居てくれた

しかしそれもすぐに変わってしまった

終業式が終わってから俺達はまたあのゲーセンに来ていた

今日はあの男は居ないようだった

遅くまで俺達は遊んでいると俺達の前をあの男が横切った

当然あいつにはあの男が見えていない

俺は無意識のうちにあの男の後を追っていた

今思えばここであの男を追ったのが間違いだったのかもしれない

あの男を追って着いたの場所は少し暗い場所にある路地裏

しかしそこにはあの男の姿は無く誰も居ない

俺の後をあいつもついて来ていた

その場に俺しか居ないのを見るとあいつは俺に向かっていった

「お前、可笑しいぞ。どうしたんだ？」

そんな言葉は色んな奴に言われた

決まって俺はありのままを説明するが誰も信じてくれない

今回もありのままに説明するが信用してもらえない

さらにあいつは続けて言った

「もう訳わかんねえよ。お前終わってるな」

親友に言われた一言だった

ついに親友にまで見放されてしまった

気付くと俺はあいつの首を絞めていた

力を込めて首を絞めているとあいつの体から力が抜けた

我に返って首から手を離す

しかしあいつは全く動かない

俺は親友を殺してしまった

怖くなってその場から逃げ出した

暗い路地裏から明るい方へ走った

通りに出た瞬間だった

何かとぶつかって俺の体は飛んでいた

どうやら車とぶつかったらしい

道路に叩きつけられると同時に全身に痛みが走った

意識が徐々に薄れていく

何も聞こえてこなくなつて視界が暗くなり始めた

俺の周りに人が集まってきた

その中にあの男の姿が見えた

男の姿と声だけが鮮明だった

「さっきから一人で何をやってるんだ？まるで誰かの首を絞めているようだったぞ」

どうやら俺は狂っていたようだ

親友の幻覚を見てそいつを殺して、そこから逃げ出した

その結果がこれだ

男がああゲーセンで言ってきた言葉をもう一度言ってきた

「人生をやり直さないか？」

俺は頷いていた

男はそれを見るところどこかに行ってしまった
意識が消える直前に俺は思った

「どうなってもいいから、もう一度やり直させてくれ」

願い通り俺は人生をやり直すことが出来た

しかし俺はあの男と出会った日から死ぬまでの日を繰り返している

初めの四日間以降にあの男が現れることは無かった

こうして俺は永遠にこの四日間を生き続ける……

終わりの無い現実を……